

分科会	小4年Ⅱ	郡市名	岡崎
提案者	岡崎市立大樹寺小学校		福田忠大

1 研究主題

『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』
 ～4年「鴨天大祭と青木川のつけかえ」の実践を通して～

2 はじめに

岡崎市の社会科部は研究テーマ『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』を受け、昨年度から研究実践してきた。昨年度の研究を通して得られた成果と残された課題は、次に示す通りである。

<p><実践単元> 6年「戦国大名 徳川家康の生き方」</p> <p><成果> ・身近な地域素材を教材化することによって、子どもたちの追究活動への意欲を高めることができた。</p> <p>・題材を取り巻く社会情勢を総合的に判断したり、自らを様々な立場に置き換えて考えたりする場面を設定することで、子どもたちは家康と自分の生き方と対比することができた。</p> <p><課題> ・学び得た社会認識を生かし、今現在の生活を見直すというところまではいかなかった。</p>
--

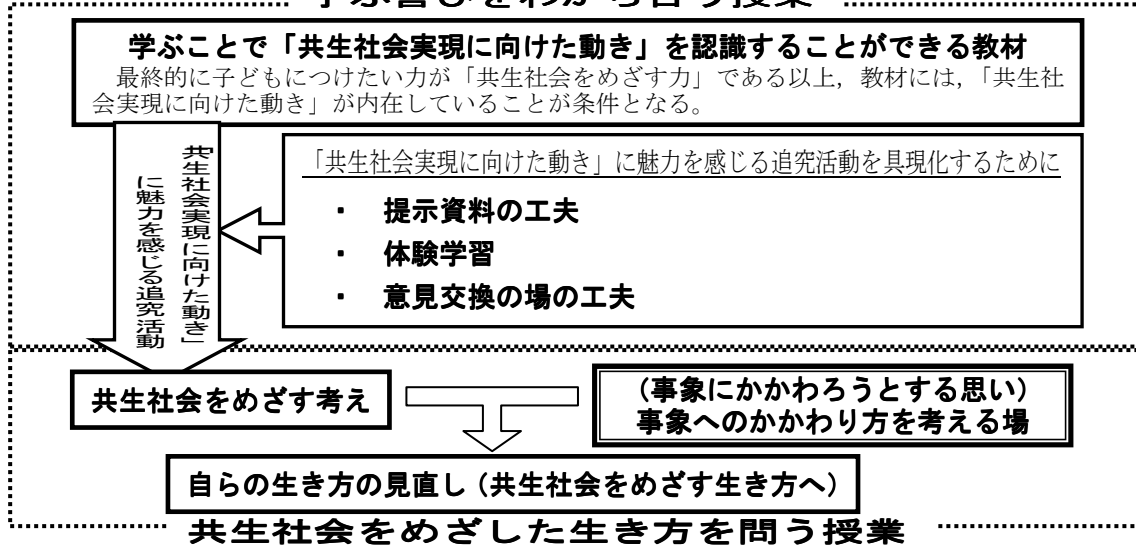
3 研究の構え

(1) なぜ「学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業」が必要なのか

小学校社会科の究極的な目標は、「公民的資質の基礎を養う」ことにある。この「公民的資質」は、その時代時々において、求められるものが変化してくる。現在の社会は、多様な価値観、見方・考え方もつ人々が存在し、混沌としている。このことから、今求められている「公民的資質」は、「**様々な価値観、見方・考え方もつ人々が、共に幸せを感じることができる社会の実現に向けて、考え、行動していこうとする力**」、すなわち「**共生社会をめざす力**」であると考えられる。

昨年度の研究実践では、先人（家康）の働きをもとに「共生社会をめざす力」をつけさせることをねらった。しかし、最終的に先人と自分の生き方の比較に留まり、「共生社会をめざす力」を構成する大切な要素である「**自らの生き方を見直す**」ところまでは至らなかった。これは、学び得た社会認識を生かし、「**事象へのかかわり方を考える場**」が欠落していたためであると考えられる。したがって、今年度は「事象へのかかわり方を考える場」を単元中に設定し、「共生社会をめざす力」への効果を探ることにした。

学ぶ喜びをわかち合う授業



(2) テーマの実現に向けて

今年度は、上記の条件を満たす可能性のある単元として、「鴨天大祭と青木川のつけかえ」（4年）を研究単元とした。青木川は、岡崎市大樹寺学区を流れる河川である。この河川は、現在でこそ学区の北端を東から西に流れ、矢作川に注ぐ流路をとっているが、江戸時代中期までは、学区内を横断するように北から南に向かって流れていた。青木川の氾濫に悩まされていた岡崎藩と学区農民は、一致協力して大規模な治水工事を行い、現在の流れに収めること（つけかえ）に成功した。この社会事象を対象に学習を進めることで、「**人々が共に幸せを感じる社会実現に向けた動き**」を感じさせることができると考えた。しかし、現在の大樹寺学区は、宅地化が進み、農業が盛んな町とはいえない。先人の努力や工夫を学習したのみでは、「共生社会をめざす考え」を育てることはできても、自らの生き方を見直すまでには至らない。「事象へのかかわり方を考える場」が必要である。この役を担うのが、「鴨田天満宮の秋の大祭」である。学問の神様として知られる菅原道真を祭る鴨天であるが、秋の大祭は「豊作への感謝

の意を表す」ことを神事として行っている。この神事は、洪水に苦しみ続けた農民たちの生活安定・向上への切なる願いがもととなっている。毎年自分たちが楽しみにしている大祭の内容と、地域を変えようと努力した農民たちの生き方がつながることで、当時の農民の願いが、今もなお自分たちの生活の場に行き続けていることを感じることができる。したがって、鴨天へのかかわり方を考える活動を通し、自らの生き方をも見直すことができると考えた。そこで、鴨天大祭という子どもにとって親しみのもてる事象と、青木川のつけかえという事象を結ぶ単元を構成し、本研究をスタートさせることにした。

(3) 研究の仮説と手立て

【研究仮説①】⇒「学ぶ喜びをわかち合う授業」

子どもたちにとって親しみのある事象を教材化し、子どもたちの思いや疑問を大切に問題を設定すれば、子どもは問題を自分のものとしてとらえ、主体的な追究活動を展開していくであろう。

単元の初めから「青木川のつけかえ」を持っていったのでは、小学校4年生には抵抗がある。まずは、「鴨天大祭」を導入に登場させる。幼いころから遊び場所となるほど、子どもたちにとって身近な存在の鴨天であるが、実は学問の神様が祭られていることはほとんど知られていない。この事実に出会えば、子どもたちの中に驚きを生むことができる。さらに、鴨天の境内にある「水田」（青木川のつけかえにつながる要素）を見つけさせる。「学問の神様の境内にある水田」というアンバランスさに、子どもは謎解きの興味をもつにちがいない。この「水田」に関する子どもの発見を問題に結びつけることで、子どもは問題に対する関心を高め、主体的な追究活動を展開する礎が形成されたと考える。また、子どもの身近に存在する事象であれば、単元の最後に事象を通して、日常を見つめ直すことが容易になる。

【研究仮説②】⇒「学ぶ喜びをわかち合う授業」

追究過程において、体験活動を効果的に取り入れたり、提示する資料を工夫したりする。さらに、友達と意見を交わす場を工夫し、適切に位置づける。このような追究活動を展開していけば、子どもは社会事象を多角的に見つめ、問題に対する確かな考えを構築していくであろう。

子どもたちは、追究活動を通して、徐々に問題に対する考えや思いを構築していく。しかし、この追究活動が資料のみに偏ってしまうと、資料に書いてあったことを消化しないまま考えの根拠としてしまい、結果あやふやな社会認識をもってしまふことがある。このことを避けるためにも、単元中に見学活動や取材活動などの体験活動を効果的に組み込む。また、本研究で扱う「青木川のつけかえ」は、江戸時代中期の事象であることから、小学校4年生では、資料が探せなかったり、探せても解説が難しかったりする。このため、知りたいことを調べるためには何が必要かということまでは考えさせ、その後の資料の調達は教師が行う。さらに、子どもが関心をもち、かつ読み取りやすいように、数値をグラフ化したり、絵図や写真を使用したりする。

子どもたちは、様々な活動を踏んで考えを構築していく。この考えは、できるだけ事象を多角的に見つめさせた上で構築させたい。そこで、友達と意見を交わす場を工夫し、適切に位置づけることにする。友達と意見交換する形態として、本研究では、2人一組の話し合い活動や学級全体での話し合い活動を適宜設定していくことにする。学習状況に応じた話し合い活動は、追究が独りよがりになったり、活動が問題からずれてしまったりすることを防ぐと同時に、学習で得たものを共有させなる。このような追究過程を踏めば、子どもたちは社会事象を多角的に見つめ、問題に対する確かな考えを構築していくことができると考える。

【研究仮説③】⇒「共生社会をめざした生き方を問う授業」

事象と、自分を取り巻く現実を関係づけて考える場の持ち方を工夫すれば、子どもは人々が共に幸せを感じる社会実現に向けた動きに価値を感じるだろう。さらに、その動きを受けて自分がどのように事象にかかわるのかを話し合うことで、自らの生き方を見つめ直すことができるだろう。

追究活動の結果、子どもたちは青木川のつけかえにかけた学区農民の生活安定・向上にかけた思いや岡崎藩の苦悩を知ることになる。ここで、再び登場するのが鴨天の水田である。現在も子どもたちに親しまれる鴨天大祭の内容と、遠い昔のできごとである青木川のつけかえがつながることで、子どもたちはより先人たちの苦労と生活安定・向上にかけた思いを身近に感じ、共感するであろう。さらに、鴨天に対するこれからの自分のかかわり方について意見を交わすことで、地域の一人としての自らの行動の方向性について考え直すことができる。このことが、「共生社会をめざす力」をつけさせる上で、最も重要であると考えられる。

仮説検証のための手立て

【仮説①】⇒主体的な学習が展開されたか

- (a) 子どもが親しみを感じる事象の教材化
- (b) 子どもたちの思いや疑問を大切に問題の設定

【仮説②】⇒問題に対する確かな考えを構築する追究活動であったか

- (c) 提示資料の工夫
- (d) 体験活動
- (e) 意見交換の場の工夫

【仮説③】⇒共生社会的要素に価値を感じ、自らの生き方を見直すことができたか

- (f) 事象と現実を関係づけて考える場の持ち方の工夫
- (g) 事象にどのようにかかわっていくのかについての話し合い

4 単元構想…次頁参照

5 抽出児童

本研究を進めるにあたり、2人の児童を抽出する。実践中の、2人の意識の変容を追いながら、仮説に対する手立ての有効性を検証していくことにする。

児童A 授業中の発言は活発であるが、その発言には根拠が伴わないことが多い。「社会科は好きか」というアンケートには、「どちらでもない」という回答をした。

児童B 穏やかで、授業中は大抵、黙って友達の意見を聞いている。「社会科は好きか」というアンケートには「きれい」という回答をした。

4 単元構想

「鴨天大祭と青木川のつけかえ」(15時間完了)

鴨田天満宮 秋の大祭(鴨天大祭)

子ども会でおみこしを
かついだよ

ビンゴ大会があって楽
しかったよ

お店が出ていて、金魚
すくいをしたよ

問題 鴨天大祭は何のためにやっているのかな。(2)

- ・「天満宮」は「天神」を祭っているんだよ
- ・「天神」は「学問の神様」らしいよ

↓

鴨田天満宮は、学問の神様を祭っているんだね。「大祭」は、勉強がよくなるためにやっているのかな。

・学問の神様なのに、水田があるのはふしぎだな

・「水田」ということは、何かお米に
関係しているのかもしれない

・巫女舞にも何か意味があるのかな

・おじいさんに聞いたら、巫女舞には
豊作に感謝する意味があるといっ
たよ

課題① 大樹寺学区は農業がさかんだったのかな。
昔の大樹寺学区について調べてみよう。(3)

航空写真(昭和40年代)比較
今と比べるとたくさん田
があるね

学校玄関の江戸時代の絵図
昔の絵にも田がかかれて
いるよ

本多豊後守時代の岡崎城図
川がたくさんあるよ。米がた
くさん採れたんじゃないかな

↓

でもこんなに川があって洪水
の心配はなかったのかな

地名調べ
川や田に関係するような
地名が今もたくさん残っ
ているよ。

課題② 大樹寺学区は川の洪水がなかったのかな。
たしかめよう。(2)

流水検証 ⇒水を多めに流すと水が川からあふれてきたよ。大樹寺のところはもちろん、岡崎城のあたりまで水びたしになった。洪水に対してどんな対策をしていたのかな。

○「正保国絵図と元禄国絵図の比較」
今の青木川は矢作川に向かって流れているけど、「正保国絵図」では、青木川が南に向かって流れているよ。洪水を防ぐために、青木川の流れを変えたんじゃないかな。

課題③ 「青木川のつけかえ」はどんなようすだったのかな。当時のようすを調べよう。(6)

つけかえ工事体験

- ・もっこ
- ・くわ
- ・さどみ
- ・じょれん
- ・土のう
- ・木づち

話し合い

- ・こんな作業、たいへんだっただろうなあ。他に方法はなかったのかな。
- ・堤防を高くした方が安く済んだんじゃないかな。

学芸員の話

- ・青木川のはんらん
- ・生活の安定を願った農民
- ・岡崎藩の決断
- ・藩と農民の協力と新田開発

↓

農民も岡崎藩も、たいへんな苦勞をしていて、生活が安定することを願って、青木川のつけかえ工事を決断したんだね。

↓

鴨天の大祭の「水田」や「巫女舞」にも、豊作を強く願った人々の願いがつまっているんじゃないかな。氏子総代の祥吾君のおじいさんの話も参考にしよう。

問題 鴨天の大祭にはどんな願いや意味がこめられているのかな。(2)

鴨天の稲とつけかえについての話し合い

- ・湿地帯だった学区と農民の苦勞
- ・豊作に感謝する思い

↓

鴨天には、昔から今まで、人々の思いがたくさんつまっているね。自分たちの周り
にある他の行事にも、何か意味や人々の思いがあるはずだよ。もっと大切に
していこう。

「青木川のつけかえ」以外に、農民たちは生活を向上させるための行動をしなかったのかな。学区のお年寄りに聞いて調べをさらに深めよう。

主な学習場面と提示予定資料

【水田・巫女舞の写真】
家庭での聞き取り、天満宮資料など通して、一度は「学問に
関係あるかもしれない」とつか
みかけた子どもにゆさぶりを
かける。また、「巫女舞」とい
う古くから伝わる舞を取り上
げること、昔のことを調べよ
うとする動機づけとする。

【航空写真・江戸時代の絵図】
数字での比較は、子どもにと
ってはとらえにくい。航空写真
や古絵図を使ったり、遊び感覚
の地名調べをしたりして、昔は
大樹寺学区でも米作りが盛ん
であったことをとらえさせる。

【本多豊後守時代岡崎城図】
米作りには水が必要である
ことから、子どもたちは学区の
米作りが盛んであったという
思いをさらに強めると考える。
しかしその一方で、現在に比べ
あまりにも多い河川に、水害を
心配する子どももいると考える。

【流水検証】
「本多豊後守時代岡崎城図」
を忠実に再現した流水検証を
行う。実際に水があふれる場
面を見た子どもたちは、洪水
対策がどうなっていたのかとい
う問題意識を持つと考える。

【学芸員からの聞き取り】
「正保国絵図」と「元禄国絵
図」との比較によって青木川
の流れが大きく変わっている
ことに気づいた子どもたちは、
なぜ変わったのか・どんなよ
うすだったのかを中心に調査
を進める。しかし、当時を証明
する文献資料が不足している
ため、岡崎市美術館の学芸員
をゲストティーチャーとして
招いて、聞き取り調査を行う。
ここで、子どもたちは当時の
農民の苦しみ、努力や工夫を知
ることとなる。

【鴨天の稲についての話し合い】
青木川のつけかえ調べを通
して、学区農民の生活安定への
願いを知った子どもたちに、
再び鴨天大祭に立ち返らせ、昔
からの願いが現在にも生きて
いることを感じさせる。

6 実践と考察

(1) 子どもの思いや疑問を大切にされた問題の設定

第一時は、子どもたちにとって身近な鴨田天満宮の秋の大祭を取り上げた。親しんでいるにもかかわらず、意外と知らないことが多い点に気づかせることで、知りたい、調べてみたいという学習意欲を喚起させ、学習問題の設定につなげることをねらった。

まず、鴨天大祭の写真を数枚見て、気づいたことを発表することからスタートさせた。一通り見せた後で、教師から「この写真の中で、変だな？何だこれ？っていうのないかな」と切り出した。すると、「あやしい踊りみたいなのをしてる」「牛の像は何？」「何で田んぼがあるの？」という疑問が出された。

「あやしい踊り」については、知っている子がいて「巫女舞」という舞であることが分かったが、それ以上のことは分からずじまいだった。どうやったら調べられるか尋ねると、「地元のことだから、家の人に聞いてみる」ということだったので、子どもたちに任せることにした。

家での聞き取りが終わっての第二時は、聞き取ってきたことを発表することから始めた。ここでは、「巫女舞が一般的に豊作に対する感謝の舞であること」「牛の像は神様の使いとされていること」が出てきたが、「田んぼ」については、家の人に聞いても知らないということだった。しかしここで、祖父が総代という児童Cが、得意気に話し出した。この児童Cの意見をきっかけに、子どもたちがつぶやきだした。資料2は、そのときの授業記録である。C45の「学問の神様なのに、豊作（に感謝するのはおかしい）」というの、なるほどその通りである。この後、

「田んぼだって学問の神様なのに」という考えも出された。子どもたちの間に、「この矛盾を追究したい」という思いが高まったと判断し、「鴨田天満宮の秋の大祭は、何のためにやっているのか」という学習問題が設定された。

さらに、「田んぼ」「巫女舞」と、お米に関するものが注目され出したので、教師から「大祭とお米が関係しているのかな」と聞いてみると、「昔はお米が大切だったのかもかもしれない」という意見が出てきた。そこで、次時は問題を解決するために、「昔の大樹寺学区の米作りはどうなっていたか」を課題として追究に入っていくことにした。

第二時を終え、児童Aと児童Bは、次のように授業日記を書いてきた。

A 学問の神様なのに、お米をほしがるとかおかしい。昔はお米がとれなくて大切だった。

B 学問の神様の場所に、なぜ田んぼがあるのかな。昔のお米は大切だったと思います。なぜなら、田んぼが少なかったから。

児童Aの「学問の神様なのに、お米をほしがるとかおかしい」という記述は、身近に存在した意外な矛盾点に対する高い関心を表している。教材として、子どもの身近にあるものを選定し、思いや疑問を拾いあげたことで、子どもは問題を身近なものとして感じるようになったといえる。

(2) 「共生社会実現に向けた動き」に魅力を感じる追究活動

① 意見交換の場の工夫Ⅰ（2人一組の話し合い活動）

第三時から、第二時の最後に決まった課題「昔の大樹寺学区の米作りはどうなっていたか」についての追究活動が始まった。ここでは、**2人一組の話し合い活動を取り入れていくことにした**。くり返すが、子どもにとっては初めての歴史学習である。追究活動のすべてを個人に任せてしまうと、資料の見方がずれてしまったり、課題に対して有効な追究をすることができなくなったりする恐れがある。そこで、2人一組で課題に対する考えや思いを話し合う活動を活用していくことにした。

授業は、課題「昔の大樹寺学区の米作りはどうなっていたか」に対し、予想を立てるところから始まった。先述したように、現在は宅地化が進み、田畑の少なくなっている学区である。昔の姿など考えもつかない子どもたちは、ほとんどが「あまりお米はとれなかった」と口をそろえた。この一方で、米作りに必要な「川・土地がある」として、「とれたのではないか」という意見もあった。しかし、どれぐらいの量が「とれた」ことになるのかということに対し、判断基準があるわけではない。子どもたちも困っているようだった。「どうしようか」と相談すると、「どれぐらい田んぼがあったのかどうか、分かるようなのがほしい」という声があがった。そこで、教師から3枚の写真・絵図を提示した（資料3）。視覚的にとらえやすかったのだろう、昭和40年代の学区航空写真が出たとたん、「すごい、いっぱい田んぼがある」「たくさんとれたんだ」という声が聞かれた。しかし、子どもたちは、独自のものさしで「とれた」のか「とれなかった」のかを測っていることが考えられた。そこで、共通の判断基準を作り上げるために、2人一組で、相談しながら資料の読み取りを行っていった。

資料1「鴨天謎のたんぼ」



資料2「授業記録」(10/4)

- T38 じゃあこの田んぼは何なのかね。
C27 先生、じいちゃんが言っとったんだけど、鴨天の「天満宮」ってさ、学問の神様なんだって。じいちゃんが言った。
T39 へえ、すごいね。そうなんだ。鴨天の神様って、学問の神様なん？
(中略)
T47 でもちょい待って。何かおかしくない？
C44 おかしい。
T48 Dさん、何がおかしいと思うの？
C45 うん。鴨天って学問の神様やのにさ、豊作っておかしい。
(後略)

資料3「3枚の写真・絵図」

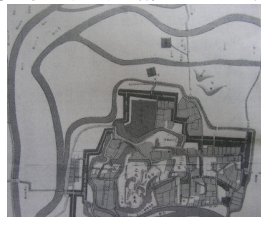
①昭和40年代学区航空写真



②大樹寺惣絵図(江戸中～後期)



③本多豊後守岡崎城図(江戸前期)



2枚目の「大樹寺惣絵図」、3枚目の「本多豊後守岡崎城図」を提示すると、子どもたちは見つけたことを話し始めた。特に、「本多豊後守岡崎城図」が提示されたときは、活発に話していた。この絵図の解釈は、子どもによってかなり違う。まず子どもたちの目に印象的に映るのは、曲がりくねった河川である。この河川について、「米作りに必要な河川がたくさんある」と、「水害が多かったのではないか」の二通りの解釈が生まれ、話し始めたのだ。児童Bも、ペアを組んだ児童Eと、身振り手振りを交えて熱心に話し込んでいた。

児童A・児童Bは次のように授業日記を書いていた。

A	ぼくは、まだ決めていません。でも、とれなければ生きていけない。
B	Eは水が多いからとれるとっていました。とれやすいかもしれないけれど、ぎゃくに、あれだけ水が多いと稲がくさってしまう。

ここでは、児童Bの日記に注目したい。普段はほとんど挙手がなく、友達とかかわることが少ない児童Bが、児童Eとかかわっていたことがうかがえる。さらに、穏やかでもすれば人に意見を押し切られてしまうことが多い子が、児童Eと私は違うと、はっきり言い切っている。2人一組での意見交換が、判断基準を明確にすることに、効果的に働いたといえる。

第四時では、子どもたちの意識が河川の方に向いてきたことを生かそうと考え、地名調べの資料を用意した。大樹寺学区には、水に関係した地名が多くある。教師が例として、「百々(どうどう)」は、

資料4「地名調べ」(10/9)

- ・「井ノ口」…川の入口
- ・「北浦」…北にある入り江
- ・「百々」…川音の高いところ
- ・「角田」…角(隅)にある田
- ・「三百田」…水さびの出る田

「川がドウドウと音を立てて流れるようすからついた名前と考えられているよ」と切り出すと、子どもたちは『堂前』も意味があるのかな?と自分の住む町はどうか興味津々である。追究活動への関心が高まったところで資料に向かわせ、地名調べを行った。資料4は、子どもたちの調べの結果である。

川の他に、田を表す地名もあげてきたのであるが、ここで子どもたちの注目を集めたのが「三百田」である。この「三百田」は、資料3の昭和40年代の航空写真で見ると、かなりの数の田が広がっている地域である。「米がとれた」と言っていた子たちは、この地域があるからこそ、「とれた」と考えていたといえる。その考えが揺らぎ始めた。資料5は、そのときのTC表である。

C25の言うことはもっともである。しかし、資料をもとにした児童I(C30)の発言には説得力があり、結局、実際に「本多豊後守岡崎城図」と同じように水路を作つて、検証してみようということになった。

② 体験学習(流水検証)

検証水路は、砂場を利用して、「本多豊後守岡崎城図」を忠実に再現した。「三百田は水さびの田になるのか」ということの検証であるため、現在の地図と比較し、このあたりが三百田であるということを確認し、水を流した。



結果は左の写真が示す通り、川が決壊し、三百田は水びたしになってしまった。この検証は、子どもたちにとって強烈な印象を与えた。検証後、児童Aと児童Bは、次のように授業日記を書いていた。

A	水も土砂も流れたら、もう全体が水になって、くらしはびんぼうになる。
B	昔、大樹寺の人は、川の水があふれるぐらいだから、何も食べれなくて、命を落とした人がいる。昔の人は、一日一日が悲しい思いをしていた。

資料「本多豊後守岡崎城図」を見ただけでは、「どちらともいえない」と言っていた児童Aでさえ、「くらしはびんぼうになる」と悲観的な見方をしている。児童Bにいたっては、「命を落とした人がいる」「昔の人は一日一日が悲しい思いをしていた」と、人々のくらしぶりにまで思いをはせている。これは、教師のねらい通りの結果である。「昔の人たちはたいへんな生活をしていた」という実感をもとにした認識がなければ、「つけかえをする意義」を理解することはできない。追究過程に、体験活動を効果的に

資料5「授業記録」(10/9)

(前略)

- T31 Gは、三百田って、どういう意味があると思つたの?
- C25 え、だって三百田じゃんね。そのまま。三百個田んぼがある。
- T32 なるほどなあ。そりゃそう思うわ。先生もそう思つたよ。Hみたいに思つた子、他にもおらん?
- C26 わたしも、Hと同じでそう思つた。
- T33 でもさ、「水さび」ってどういうのさ? どんなイメージ?
- C27 さびが出てくる。茶色のやつ。
- C28 ぼくは、Hとちがって、こう…(略) 水びたしみたいな感じ。
- C29 Iに質問で、何で水びたしなんですか。
- C30 えー。(略) 先生、前出ていい?(黒板貼付の資料「本多豊後守岡崎城図」を指さして) だって川がこうやってあるやん。川があふれてくる。
- C31 あふれんよ!

(後略)

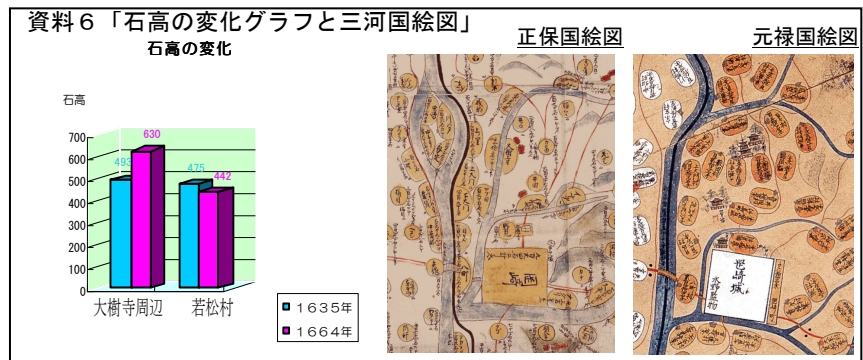
組み込んだことで、子どもたちに「共生社会実現に向けた動き」の原動力となる、人々の生活安定・向上に向けた願いを感じさせることができたといえる。

③ 提示資料の工夫

子どもが「大樹寺周辺は水害で困っていた」という印象を強烈にもったところで、この事態を打破する「人々が共に幸せを感じる社会実現に向けた動き」を認識できる社会事象「青木川のつけかえ」を登場させようと考えた。しかし、つけかえの事実を知っている者が「本多豊後守岡崎城図」を見れば、青木川の流路が現在と異なっていることに気づくことができるが、子どもたちが気づくことはできない。そこで、子どもたちに流路が変わっていることに気づかせるために、新たに資料を準備した。「三河国『正保国絵図』」と「三河国『元禄国絵図』」である。さらに、流路の違いを採す動機付けとして、「石高の変化」のグラフも作成した。

「石高の変化」グラフから、水害で苦しんでいたはずの大樹寺周辺の石高が、他の村と比較しても伸びていることを読み取った子どもたちは、「何か秘密があるはずだ」と考え始めた。そこで、教師側から「正保国絵図」と「元禄国絵図」を提示した。子どもたちは、すぐに青木川の流路が変わっていることに気づき、その後の話し合いで、「青木川の流れを変えることによって、石高を上げることに成功した」と結論づけた。

児童Aと児童Bは、授業日記に、次のように書いてきた。



- A 大樹寺の人たちが、こんなすごいことをするとは思わなかった。川があふれて苦しんでいたけど、こうすればだいじょうぶだと思った。
- B 川（の流れ）を変えることを思いつくなんてびっくりした。でも、自然ではなく、人工でやったと思うから、すごく苦労して変えたと思う。

二人の日記からは、先人の知恵と行動に対する驚嘆が見てとれる。資料面の工夫が効果的に働き、「共生社会実現に向けた動き」に魅力を感じる追究活動となった。

④ 意見交換の場の工夫Ⅱ（学級全体での自分と異なる視点や立場を認める話し合い）

「青木川のつけかえ」の事実を知った子どもたちは、「どうやってつけかえをしたのか」という疑問をもち始めた。しかし、このまま「どうやってつけかえをしたのか」という問題を追究していくと、米がとれなくて困っていたという立場からしか、つけかえという事象を見つめることができない。「青木川のつけかえ」に内在する「人々が共に幸せを感じる社会実現に向けた動き」は、そんな単純なものではない。当時は、武士も農民が収穫した米をもとに生活していた。つけかえという大事業は、武士・農民という立場や考えの違う人々が思いをひとつにすることで実現したのである。そこで、江戸時代の武士と農民の関係を調べることから、追究活動に入っていくことにした。

農民は年貢を納めなくてはならないという事実をとらえると、子どもたちの中に二つの考えが生まれてきた。ひとつは「つけかえをすれば、少しは自分たちの生活も豊かになるのだから、つけかえに賛成していた」という考え。もうひとつは「つけかえをしても、ほとんど年貢でとられてしまう。さらにつけかえ工事をしている間に、事故にあうかもしれないし、自分が生きている間に完成しないかもしれない。だからつけかえに反対していた」という考えである。武士は、自分たちの取り分が多くなるのだから、当然望んでいたというのが子どもたちの考えだった。

この二つの考えは、当時の農民としては当然もち得る心情である。しかし、最終的にはつけかえを行っている。考えや見方の違う人々が、共に幸せを感じる社会実現に向けて動いたのである。ここで、**二つの考えをぶつけ合い、互いの考えを分かり合うような話し合い活動ができれば、「共生社会実現に向けた動き」にふれることも可能であると考え、話し合い活動を行うことにした。**資料7は、そのと

資料7 「授業記録」(11/24)

- (前略)
- C57 でも、結局つけかえはやったやん。
T34 そうだね。みんな考え方が違うのになぜやれたの？
C58 青木川のつけかえをしないと、結局米がとれないからやった。自分のためじゃなくて、みんなのために米をたくさん作るうと思ったから。
C59 一番目が、隣の人がすごく一生懸命やっていたから、それに心が動かされた。でやった。自分たちの子や孫のことを考えてやった。
T35 今言った意味わかる？自分たちの子や孫って子孫っていうことだよな。
C60 うん。
T36 それって、だれのこと？
C61 いろいろだけど…。
C62 もしかしてうちらもそうかもしれないと思う。だってずっと大樹寺に住んどるから。
(後略)

きの授業記録である。

前半は、これまでの追究活動で抱くようになった主張を言い合うばかりで、「共生社会実現に向けた動き」には一向に向かわなかった子どもたちだった。しかし、C57の「でも、結局は（つけかえを）やったやん」という一言で、一気に「共生社会」の方向へ向かった。C58の「自分のためじゃなくて、みんなのためにも米をたくさん作ろうと思ったから」という意見からは、まさに地域全体のことを考えた「共生社会実現に向けた動き」を感じ取ることができる。さらに、C59の「自分たちの子や孫のことを考えてやった」、C62の「もしかしてうちのこともかもしれないと思う」からは、青木川のつけかえという事象を、遠い江戸時代のものとせず、今の自分たちの生活に関係しているものであるととらえている考えが見てとれる。

児童Aと児童Bは、授業後、次のような授業日記を書いた。

A	青木川のつけかえは、みんなのことを考えてやったということがわかった。米作りもやらなきゃいけないのに、大樹寺の農民はすごいと思った。
B	子や孫のことまで考えてやるなんて、農民はやさしい。もしそうやって考えてくれなかったら、青木川は今も流れていたと思う。もしかしたら、私たちのことまで考えてくれたかもしれないなんてすごいです。

児童Aの「大樹寺の農民はすごい」、児童Bの「農民はやさしい」「私たちのことまで考えてくれたかもしれないなんてすごい」という記述からは、「共生社会をめざした農民の姿」に感動した様子が見える。しかも、児童Bは、「もしそうやって考えてくれなかったら」として、農民に対する感謝の念までもつようになった。考え方や見方の違う人々に寄り添った話し合い活動を通して、「共生社会をめざす考え」が形成されたことを感じた。

(3) 社会事象と現実を関係づけて考える場の持ち方の工夫

「共生社会をめざす考え」ができたところで、「過去の社会事象（青木川のつけかえ）と現実（鴨天大祭）を関係づけて考える場」を設定することにした。ここでは、子どもたちと相談し、前時のC62の発言（資料7参照）を受け、「青木川のつけかえと鴨天大祭は関係あるのか」を課題とした話し合い活動することにした。前時の話し合いによって、クラスのほとんどの子が「共生社会をめざした農民の考え」に同調している。ここで話し合いによって、**青木川のつけかえと鴨天大祭をしっかりと結びつけることができれば、さらに「共生社会をめざす考え」が強くなり、「事象へのかかわり方を考える場」において、「自らの生き方への見直し」ができる**と考えたからだ。資料8は、そのときの授業記録である。

話し合いは、序盤から「ありがたく思っ
て祭っている」（C12）、「つけかえをした
人たちに感謝の気持ちを表している」（C
14）、「昔の人にありがたうと思っ
てお米を
育てている」（C15）と、先人の「共生社会実現に向けた動き」が、今現在生きている自分たちの生活の場に生きているという考えをうかがわせる意見が続いた。その中で、C16だけが「関係ないと思います」と言い出した。しかし、その発言内容は、「青木川のつけかえという偉業を、今の地域住民はわかっていない」というものだった。それに続く、C18、児童Bの発言も、「今の鴨天大祭は、青木川のつけかえに対する感謝という本来の意味をなくしてしまっている」という内容だった。子どもたちの中に「共生社会をめざした農民の考え」が理解されていない現在の社会に対する憤りが芽生えていることが感じられる。

この気持ちを受け、最終時「鴨天大祭は何のためにやっているのか」に入っていくことにした。

(4) 事象にどのようにかかわっていくのかについての話し合い

前時で、青木川のつけかえと鴨天大祭の関係について話し合っていたので、課題「鴨天大祭は何のためにやっているのか」については、「つけかえをしてくれた人たちと、つけかえのおかげでとれるようになったお米に感謝」というように簡単に結論がでた。しかし、問題が残っていた。「鴨天大祭の本来

資料8「授業記録」(11/30)

(前略)

- T5 それでは教えてください。関係はあるのかな。
- C12 私は関係があると思います。なぜかという、昔貴重だったお米が、つけかえによって、昔より多く食べれるから、そのことをありがたく思っ
て祭っている。
- C13 ぼくは関係あると思います。なぜなら昔、米はとても貴重なもので、大樹寺周辺っていうか、で、そこで今では気楽にお米が簡単に食べれるけど、昔、青木川のつけかえをした人たちに感謝の気持ちを表していると思う。
- C14 私も関係あると思います。なぜかという、昔はお米があまり取れなかったりしてたけど、川のつけかえによってとれるようになったけど、そのつけかえがなかったら、今もとれなかったかもしれないから、昔の人にありがたうと思っ
てお米を育ててる。
- C15 私は関係ないと思います。なんかさ、私たちは勉強したからそれがわかってるけど、他の人たちはそういうことわかってないと思うから。そんなくわしいことまで。だもんで、関係ないことになる。
- C16 それってやっぱ関係あるってことやん。
- C17 わかっているかどうかってことじゃなくて、関係あるかってことだったら、関係ある。でも、鴨天やっ
とる人たちはほとんどそのことを知らないと思う。
- 児B さっき、Lさんはみんなわかってないはずって言って、わかってない人は多いと思うけど、昔はこんな苦勞をしてたんだよとか、そういうのをわかっ
てもらいたい。

(後略)

の意味がなくなってしまうってよいのか」という問題である。この問題に対し、子どもたちは次年度の鴨天大祭に向けた自分たちのとるべき行動を話し合った。結果、資料9のような提案があがってきた。子どもたちなりに、「青木川のつけかえ」にかかわった人々の思いを精一杯受け止め、応えようとしていることがわかる内容である。

資料9「鴨天大祭に向けた提案」

- ・つけかえのことをみんなに知らせる。
- ・田んぼを感謝の気持ちをこめて世話する。
- ・昔の人の気持ちを受け継いで、お米を大切に
- にする。
- ・感謝して鴨天を掃除する。

次の授業日記は、授業後に児童Aと児童Bが書いたものである。

A	ぼくは、こんなに社会をがんばって勉強したのは初めてです。すごくおもしろかったです。青木川が学校のすぐそばを流れていたことがびっくりしました。鴨天の祭りに青木川が関係あることもびっくりしました。ぼくは、もっと昔の人にありがとうと思って、お米を大切にしていきたい。
B	私は、鴨天大祭でいつも遊んでいました。でも、社会で青木川のつけかえのことがわかったので、これからはもっと鴨天を大切にしていきたいです。たぶん、お母さんも知らないので、教えてあげたいです。私たちだけではいけないと思うので、みんなに教えてあげて、もっと農民たちに感謝する大祭にしていきたい。

児童Aの「もっと昔の人にありがとうと思って、お米を大切にしていきたい」という記述からは、今の自分の生活に「共生社会をめざした農民の思い」を重ね合わせて、これから改めていきたいという考えが伺える。また、児童Bの「これからはもっと鴨天を大切にしていきたい」「みんなに教えてあげて、もっと農民たちに感謝する大祭にしていきたい」ということばには、農民の思いを受け止め、地域を大切にすることを広めていきたいという思いが表れている。子どもたちが、「共生社会をめざす考え」をもとに、自らの生き方を見直したと感ずる瞬間であった。

7 研究のまとめと今後の課題

研究仮説①

研究仮説①については、単元を通して主体的な学習が展開されたかどうかという観点で、手立て(a)(b)の有効性を探る。

検証

単元を通し、子どもたちは主体的に学習に取り組めたととらえることができる。それは、追究活動中の子どもたちの姿(授業記録参照)や、最終時終了後の児童Aの授業日記からもうかがい知ることができる。また第二時終了時の授業日記の内容は、手立て(a)(b)が有効に働いていることを表している。研究仮説①に対し、手立て(a)(b)は有効であるといえる。ただし、主体的な学習が展開されたのは、手立て(a)(b)のみでなく、手立て(c)(e)も作用したためであとも考えられる。よって、手立て(a)(b)は、研究仮説①の必要条件ではあるが、絶対条件ではないと考える。

研究仮説②

研究仮説②については、問題に対する確かな考えを構築することができたかという観点で、手立て(c)(d)(e)の有効性を探る。

検証

ここでいう「確かな考え」とは、「共生社会をめざす考え」である。この点で、子どもたちは、確かな考えを構築することができたこととらえることができる。それは、「農民はつけかえを望んだのか」の話し合い後の授業日記や、資料8における児童Bの発言内容からも明らかである。また、水路モデルによる検証場面からは手立て(d)、つけかえの事実を知る場面からは手立て(c)が、有効に働いている様子がうかがえる。さらに、前述の「農民はつけかえを望んだのか」の話し合いの記録は、手立て(e)が「共生社会をめざす考え」を作り上げる上で、有効に働いたことを表している。

研究仮説③

研究仮説③については、自らの生き方を見つめ直すことができたかという観点で、手立て(f)(g)の有効性を探る。

検証

資料9の「鴨天大祭に向けた提案」、最終時終了後の授業日記は、子どもたちが自らの生き方を見つめ直す姿を表しているといえる。また、資料8の話し合いの内容、その後の子どもたちの様子から、手立て(f)(g)ともに、生き方を見つめ直す点に関して、有効に働いたと考えることができる。

今後の課題

研究仮説に対し、手立ての有効性は概ね実証されたが、今後の研究に次のような課題が残った。

- ・今年度の実践は、「共生社会をめざす考え」を意識させた上で、「事象へのかかわり方を考える場」において、自らの生き方を見直させることをねらった。しかし、実践を振り返ってみると、「事象へのかかわり方を考える場」もそうであるが、「事象と現実を関係づけて考える場」が非常に重要なポイントとなったと思われる。**事象を追うることによって生まれる社会認識と、現実社会とをいかに重ね、結びつけるか**が、今後、社会科の授業で「共生社会をめざす力」を育む上で、深く研究していくべき課題であると考えられる。